

節分の日考えたこと

横田 理恵子

時節外れとなりますが、今年 2021 年の節分は 124 年ぶりに 2 月 2 日でした。節分は季節を分ける。旧暦では立春が新年となるので、その前日は大晦日となります。

私が節分で思い出すのは、『源氏物語』「幻」の巻で、匂宮が「大きな音を立てて鬼を追い払うには何をさせればいいだろう」と走り回る場面。年が明けたら出家を決意している光源氏が、「もうすぐこんなかわいい姿も見られなくなる」と幼い孫を見ているところです。俗世から離れる寂しさと、幼児の明るさが対称的です。「鬼やらい」、「追難・ついな」として疫鬼を追い出すのですが、今のように豆を投げるのではなく、四つ目の面をかぶった方相氏、付き従う仮氏が鬼を内裏から追い、鬼が出たことを鼓で知らせて都の外へ外へと追放します。長くなるので興味のある方はお調べください。

『源氏物語』では千年後の現代にも通じる人間関係が取り上げられますが、私は紫式部の子どもの描き方に感心します。雀の子が逃げたと言って走ってきた紫の上の初登場。十歳くらいですが、髪は扇を広げたようにゆらゆらとして、顔は手でこすってひどく赤くしている（「若紫」）。実母の身分の低さゆえに紫の上に引き取られてゆく光源氏の娘、明石の姫君と母である明石の君の別れ（「薄雲」）。よだれを垂らして笛をかじる、歯が生えかけた薫（「横笛」）。自分も子育てをして見たことのある光景ばかりだけど、日々の忙しさの中でいつの間にか忘れてしまっていたことに気付きます。千年前の物語を読んで自分の子育て時代を回想する、というのもまた読書の醍醐味でしょう。